

本蓄水氏、以上の同人達により第一夜は盛大な宴会で裏芸など続出、第二日は薩摩筑前の達人数氏が芸を競って楽しみ十三日恙なく帰京した。(松本蓄水氏の通信による。)

大阪吉祥寺義士祭に琵琶奉納

十二月十四日昼、大阪琵琶同好会協賛。松の廊下、島津、赤垣源蔵、米原、大高源吾、矢野旭信、別れの盃、辻旭城、義士本懐、鈴木、別所、青柳、大石主税、作花旭友、義士本懐、石橋旭嶺、雪の曙、田中款水、村上喜剣、奥村旭美、神崎与五郎、天津八千代。

日本琵琶芸術普及会十二月例会

十二月十六日昼東京文京区大家の貸席京屋。諸弾法、錦幽、坂本竜馬、青山誠、小督、福田輝峰、茶摘み歌、内田隆章、門出、坂入晴峰、吹雪の敵、青木早水、知己、山崎錦幽、山科の別れ、高田米水、名残の緒、若宮旭登、秋風故郷の山、金森旭弾、修善寺物語、杉山旗水、名月逢坂山、鈴木流泉。以上研修のあと忘年会に移り日本交通公社滝川先生、琵琶界後援社会田先生を来賓に迎え楽しい一時を過ごして七時散会した。

錦心流琵琶演奏会

十二月二十二日(土)夕五時半東京上野本牧亭。主催一水会本部企画部(有料)。松の廊下、石崎麗水、同、花俣圭水、山科の別れ、石井桑水、同、渡辺声水、村上喜剣、梅沢

响水、神崎与五郎、座間燦水、大高源吾、田中光水、同、河合桃水、別れの盃、藤川晴水、同、榎本山水、雪晴れ、関惠水、同、平野鉦水。

京都琵琶協会一月例会

一月六日(日)昼一時本部平井会長宅。馬場鴨水、林旭萌、揚嶽水、田中款水、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、牧南水、荒木旭媛、桜井旭富、水内燦水、平井春嶺、植村真水各会員の外故伊吹正陽氏令夫人も出席、数氏研修演奏のあと牧会計理事から昨年度の収支決算報告があり引続き新年の宴に移り隠し芸なども出て興を添え七時半をこやかに散会した。

日本琵琶協会の定期総会

一月十九日(土)昼一時東京豊島区高松の高三会館。三時から新年懇親会。(次号詳報)

錦心流一水会会長交代と本部移転

会長鈴木六水氏病氣辞任のため副会長中谷裏水氏新たに会長就任、本部を東京都豊島区南池袋三ノ一五ノ一内田ビル二階に移転。本部宛通信その他の連絡は従来通り新宿区北新宿一ノ二五ノ一四松田殊水氏宛にすること。

訃報

谷 暉水氏 昨年十二月五日老衰のため逝去、享年八十二。元一水会々長で現在一水

会名誉顧問として活躍し優秀な多くの門弟を世に送り出した錦心流の元老であった。謹んで哀悼の誠を捧げ御冥福を祈る。

予告

○京都琵琶協会二月例会 二月三日(日)午後一時本部平井春嶺会長宅。
○各流派合同琵琶演奏会 五月二十五日(日)午前十一時京都商工会議所ホール。京都琵琶協会・一水会京都支部・四明会共催。

あごと

屠蘇機嫌で、ついうかうかと過して居るうちに早くも二月の声を聞く。ここ当分は琵琶界も沈滞気味だが、やがて氣候がよくなれば、また活気を呈しよう。春に備えて充分鋭気を養われたい。未だ当分厳寒と闘わねばならぬ、同好の皆様、この上ともどうぞ御自愛下さい。

昭和五十五年二月一日発行(非売品)
編集者 植村 眞水
発行所 高槻市津之江北町一ノ二二三
電話 〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶 機関紙

京

結

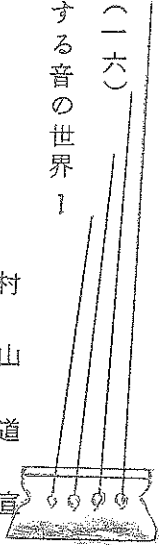
第三〇八号 京絃社

琵琶

琵琶 (一六)

忘れられんとする音の世界

村山道宣



薩摩琵琶(下)

薩摩琵琶の特色

地神琵琶には次第に改良が加えられていった。胴はふくらみ、音量の増大が図られ、地神琵琶にもともと付いていたアールは縦、横とも拡大され張りのある冴えた音色が出るように工夫された。柱は六柱のうち二柱が外され四柱となり、かなり丈のある柱が使われるようになった。この結果、一柱と二柱の間隔(鳥口より数える)が大幅に拡がり、また柱の丈が高くなったことにより「押えの弾法」が効果的に使えるようになった。そしてさらに「さわり」によって生ずる余韻は増し微妙な音色、音の動きの変化が良く表現されるようになった。胴木には堅木が用いられ、胴強い(薩摩では俗に「胆力がある」という意で使われる)遠音の効く音が重んじられた。即ち余韻の多い音が雅とされ、少ない音が俗と

されたのである。琵琶はどこまでも雅味を保ち、俗臭を帯びぬよう改造されたのであった。また撓は扇形に大きく広げられ、撓面を強く叩く打音の妙を良く発揮出来るように改造された。なお、当時の弾法は右方の肩上より撓を打ち込むのが土風の心得とされた。もし撓奏中、事あらば直ちに右手の撓を以って右手の肩間に打ち込み、その間に脇差しを執って応ずるのがその弾法の心得であった。

江戸時代の中期に入ると琵琶の弾法にも大分工夫が加えられ、「崩れ」(勇壮な場面を演ずる際、急速に数本の絃を撓で連続してかき鳴らす奏法を言う)などのような複雑な手が用いられるようになった。殊に町中ではその技巧もより一層艶麗になって来たので、それを町風琵琶と呼び、旧来の土風琵琶とは区別するようになった。しかしそのいづれも武士達の間で行われるものであり、琵琶を弾くことは一般の町人や農民には禁ぜられていた。

とここで、私は崩れの弾法に関して特に面白いと思っていることがある。それは薩摩の農民の間で広く用いられていた「ごったん」と呼ばれる板三味線の弾法に、この崩れの弾法が良く似ているということである。ごったんは暫女さん達も、唄や語り物の伴奏楽器として用いていたが、恐らく崩れに見られるような繁手な奏法が広く民衆的な拡がりを持っていたのであろう。また崩れの手は平家琵琶の拾いの手(崩れの手と同様に勇壮な場面に用いられる)の奏法にも似ている。この崩れの弾法は薩摩の武士達が平家琵琶の拾いの手を参考にし、また盲僧を媒介として庶民楽器の奏法を汲み上げ昇化させたものであると私には思われる。

薩摩琵琶には儒学や武士道を背景とする薩摩武士の美意識や精神主義が色濃くその影を落していた。琵琶歌に於いてひたすら無常を説くのも死生の域を脱して安心立命の道を得させ、難に耐えさせんがためであり、また中古義烈の非歌を詠ずるのも、武士達の士気を鼓舞し、軽俳浮薄なることを戒めんがためであった。

薩摩の武士達にとって琵琶は正に士気の高揚、精神力練磨のための「薬」であり「教養」であった。即ち琵琶は薩摩の国風育成のための強力な教育の手段だったのである。このようにして薩摩琵琶は、士気一般の愛用物となり親しまれるようになっていったのである。

薩摩琵琶の東京進出

その後、明治維新を迎え、薩摩の多くの名士達が上京するようになる。その中には琵琶の名手、西幸吉や吉水経和(初代錦翁)を始め多くの琵琶家がいた。彼等の中でも琵琶の普及に特に熱心であった吉水経和は錦水会を開き、多くの青年達に琵琶歌を教えた。また琵琶の名手達の中でも、特に明治天皇の御寵愛を受けた西幸吉は、しばしば宮中に参候し琵琶歌の御前演奏を成した。その頃より世人はこれを薩摩琵琶と呼ぶようになり、明治から大正にかけて薩摩琵琶は大いに流行したのである。殊に日清、日露の大戦は多くの忠勇義烈の物語を生み、またそれを題材にした琵琶歌も多く現われるようになり、一層の流行を招いた。その後明治の末には永田錦心が現われる。錦心は幼少時より嗜んだ種々の芸を生かし、従来の薩摩琵琶(一般にはこれを正派と呼ぶ)に自ら工夫した楽風を加え独自の流派を開いたのである。これを錦心流と云い、その門弟は急速に全国に拡がった。さらに昭和の初めには錦心流の琵琶家水藤錦徳女史がその琵琶に三味線音楽を取り入れ、五個の柱を持つ新しい琵琶を考案し、撓も薩摩琵琶のものよりやや小振りのものを用い、新様式の琵琶歌を創作した。



五絃閑話(五)

水藤 五郎

伝承とは(一)

演奏面に於いて、客席の人々を如何に魅了するかと云う研究が不足している琵琶界では、当然の事ながら、客席の人々は飽きて一人去り、二人去りの状況が続いてきました。この為、琵琶はダメ// 琵琶はつまらない// それで人は来ないのだ// 等々の諦めと、退潮ムードが支配的となりました。しかし、よく考えてみると、今日、隆盛を極めている詩吟と、如何なる芸能の相異があるのでしょうか。詩吟が琵琶よりも愛される芸能である要素は何でありましょうか。この場合、常に下される結論は、詩吟の端的さ、琵琶演奏の長さであります。

琵琶の演奏が、大抵の場合、十五分から二十分前後であることは知られていますが、現実論として、これからは十分前後が要求されるでしょう。又、そうでなければならぬと思えます。が、今日までに、すでに完成されている曲目について、不必要な短縮を行ったり、切り捨てを試みたりすることには賛成出来ません。それは、自らの手で、古典の伝

承を諦めることに通じるからです。むしろ、演奏技法の修練を求めることによって、二十分の曲でも、五分ぐらいであつた// と人々に錯誤させ得る力量を極めることであります。若し、琵琶演奏に於て、これ等の課題が解決されれば、詩吟と同様、多くの人々に親しまれる状況になる筈です。

今日の琵琶界で最も急がれることは、良い後継者を求めることですが、その場合、後継者になりたいたいと思われれるに足る芸術でなければならぬでしょう。つまり、琵琶がその様な魅力ある芸術であり、琵琶界がその様な魅力ある社会集団でなければならぬと云う訳です。現代邦楽やテレビの中と異つて、現実には琵琶会に若い人々を呼び集めることが難しい今日を考える時、後継者となる若い人々には魅力ある芸能として、社会集団として、琵琶界が、琵琶が映っていないのです。何十年の間、琵琶の道を修めてきた人々にとってみれば、琵琶ほど、妙なる絃音と、情愛溢れる歌詞はないのです。ところが、今日の状況は、稀に訪れる新人愛好者の他は、琵琶を理解する人は少ないのです。この意識の差を埋める為には、余程の要因が働かない限り、個人的努力は無に等しいものと思えます。つまり、一人がいくら頑張っても、数人の努力があつても、百万人、二百万人の愛好者を作り、多くの人々に心から親しまれる琵琶とすることは至難の業でありましょう。が、余程の要因があれば、個人の努力、数人の協力

も活きたものになると思っています。

この場合「余程の…」とは、一つの事柄ではありません。則ち、社会的な力、社会的な流れの中から生まれる変化であります。端的に云えば、我が国の文化が、今日の状況より更に、民族的なものになって、戦前の様に、歴史教育や国語教育が重視されて、今日以上に、伝統を解する風潮になれば、邦楽に於ける、琵琶の地位も上がるやもと考えられる事です。しかし、これは良害あつて、無理な望みです。しかし、これは良害あつて、無理な望みです。しかし、これは良害あつて、無理な望みです。琵琶を学校の音楽鑑賞の一部に取り入れる状況になる、と云う社会的変化は、現実として、あり得ることです。

もう少し良い方向に進んでゆくと思えます。では、この社会に於ける変化一端的な例として、前述した学校の音楽教育への参加がどうすれば生まれるかあります。よい演奏を志すと同時に、それを如何に広めるか、いや、理解してもらうかの工夫をする、これが第一でしょう。そして、琵琶界が一番思っている問題でもあります。

判官その日の装束には、赤地の錦の直垂に紫裾濃の鎧着て、鍬形打ちたる兜の緒をしめ、黄金作りの太刀を佩き、二十四さしたる切斑の矢負ひ、滋藤の弓の真中取り、沖の方を睨まへ大音声あげて「一院(法皇)の御使、檢非違使從五位の射源義経」と名乗る。(平家物語)



九郎判官義経(四)

ばくすい

若し、この状況が確実になるのなら、新しい展望も開かれてくると思えます。詩吟と同じく、琵琶が多くのの人々に親しまれる為、演奏内容の研究と、演奏技法の修練が要求されることはごく自明の論であります。が、往々にしてこれが忘れられ、又、誤解されていることです。つまり、詩吟を琵琶に取り入れられたり、たゞ、短かい時間で演じること等々に重点が置かれることです。そして過去数十年、この誤解がつづいてきて、詩吟の如く人々に親しまれるものになり得ていないのです。では、その演奏とは何かと云うと難かしいのですが、一言すれば、飽きないで魅力のあるもの、と云えるでしょう。この演奏に心を注ぐ人々が居て、多くの数で協力し合えば、いくつかの社会要因と結びついて、

兵は神速を貴び勝は奇襲による。義経はこれ信じ、之を実行する。五艘の兵を合わせて僅かに百五十騎、この小勢を以て十七日の夜、讃岐へ越え、十八日の朝、屋島を攻める。平家は、不意を討たれてあわてふためき、われもわれもと船に乗り沖へ逃げようとする。源氏は渚に馬を乗り入れ乗り入れ、之を追う。

そのうち夕暮れとなり、双方相引きに引いた所へ、沖の方から小船一艘汀近く漕ぎ寄せて来た。見れば船の中には十八、九才の少女紅の袴をはき、日の丸の扇を立てて、これを射よと源氏を招く。義経は、これを射落として得る者あるかと尋ねれば、下野の国の住人那

須与市宗高ならば射死せようと思える。義経は与市を召してあの扇の真中を射よと命じるが、与市は自信が無いと一応断れば、「従軍の者義経の下知背くべからず、命令に背く者は直ぐに鎌倉に帰るべし」と云えば、与市は「御命令でございますれば、やってみましよう」とて罷り立つ。黒き馬の太く遅しきに乗り、海中へサッと乗り入れた。

ける。皆紅の扇の夕日の輝くに、白波の上は平家、舷をたたきて感じたり。陸には源氏、旗をたたきてどよめきけり。平家物語

今は亡き戦艦大和(下)

日本海軍の威容を誇る

辻 旭 城

ころは二月十八日酉の刻(午後六時)ばかりのことなるに、折節北風烈しく吹きければ、磯打つ波も高かりけり。船はゆり上げゆりすえ漂へば、扇も串に定まらず、ひらめきたり。沖には平家、船を一面に並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。(中略)与市、目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別しては我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願わくはあの扇の真中射させて給はせたまへ。是を射損するものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向ふべからず、今一度本国へ帰さんと思しめさば、此の矢はづさせ給ふなと心の中に祈念して、目を開きければ、風も少し吹き弱りて、扇も射よげにこそなりたりけれ。与市、扇を取りよ番ひ、能く引きて、ひやうと放つ。(中略)弓は強し、扇は補響くほどに長鳴りしてあやまたず、扇の要ぎわ一寸ばかり置きて、ひいふつとぞ射切りたる。扇は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ採まれて、海へさつとぞ散りたり

つづく九艦隊のうち、この出陣を見た某一等水兵は「司令長官閣下のお出ました、皆しっかりやろうぜ」と絶叫したが、この叫びはそれぞれ部署についていた二、三名の戦友に聞こえただけであった。この話を伝えた艦内にある全兵員は、ますます死守の決意を新たにしたのであった。一部始終を目撃していた聯合艦隊参謀は「海軍集団は負けていないようだ」と漏らしたが、聯合艦隊に対しては「聯合艦隊の実情は、ただ悲惨の二字にあるのみ」と無線報告したということである。

かくて全域鉄壁を誇る不沈艦大和は、豊後水道を過ぎ大隅の半島沖にさしかかった。四月七日の午前一時半、半島沖をはなれて数時間後、海上の上空にB29が一機、どこからともなく飛来して爆撃を加えた。これが今次大戦で受けた国内最初の空襲であったが、

寒中御見舞

錦琵琶

木原綾子

外門人一同

〒274 東京都新宿区西大久保三ノ四ノ三
電話〇三(二〇八) 七七六四番
船橋市高根台四丁目十五ノ四
電話〇四七四(六六) 七九四〇番

東洋音楽学会々員
邦楽木犀会相談役

普門義則

号史 城

〒238 東京都葛飾区堀切二ノ六〇ノ三 清和荘
電話〇三(六九四) 九七九番
研究室 (新光文化教室)木・金
〒124 横須賀市富士見町三ノ七
自宅 電話〇四六八(二二) 三三三番

被害は軽微であった。こうした空襲があったからは、大和の司令塔上には嚴重な見張りが置かれ、要員は決死の任務についているうち、四月十日の午前十一時四十分ごろ、坊の岬の海上を進行中、突如南方洋上からB29、約九〇機の編隊からなる敵機が大和に近づいてきた。見張所からは、いち早く「敵機襲来」の報が司令室に飛んだ。

戦艦大和を始め九隻の艦隊へ向け、約五時間わたって反復攻撃が加えられ、いわゆるじゆうたん爆撃によって、爆弾や焼い弾など六万四千数百個を各艦めがけて投下した。このため一挙に一五〇余カ所から出火し、撃沈するものや、二日間にわたって燃え続けた軍艦があったという。

戦艦大和にあっては、四月七日の空襲で弾薬は殆んど使い果たし、しかも補給は全くなくその全員の労苦は言語に絶するものがあったという。四月初め特攻出撃の命を受けて勇躍出発した。老練で部下思いの石田兵曹長は、よく水兵を掌握し、労わり、励ましつつ海上作戦を指導していた。

しかし糧食の補給はなく、海兵たちは数日に及ぶ絶食のため体力は既に限界を越え、連日の激動に堪え切れず、倒れてゆく兵士も少なくなかった。生き残った藤木兵曹は四月十日の大空襲に敵弾を受けて倒れた。そばで見ている石田兵曹長は倒れた藤木兵曹に近寄り

「しっかりせよ、さあ行こう、医務室へ、傷は浅いぞ、元氣を出せ」と励ました。既に死を覚悟した藤木兵曹は「もう駄目です、私はここで戦い、最後に自決します。」と答えた。その決意は動かし難いほど堅かった。兵曹長はうなづいて、兵曹の手を握り「藤木君、東京九段の靖国神社で必ず会おう」と涙ながら最後の言葉を交した。

藤木兵曹は、兵曹長を見送るや、腰を下ろしたまま向きを変え、敵機の飛来する大空を睨み付けていたと言う。木村海軍中尉に、密かに遺書を託し、この時既に死を覚悟していた石田兵曹長も、二十年四月十日の夜半から十一日にわたる機銃掃射の激闘で戦死した。最後に太平洋上戦艦大和と共に、散華された多くの英霊の冥福を祈って、筆をおく。



大原御幸

大野恵造 作詞

人の世はこれ 榎花一朝の夢なりけらし玉葛 身にぞ纏える白露の建礼門院に 見さんと大原に御幸ありにけり 思いきや深山の奥に栖居して

寒中御見舞

錦心流一水会静岡支部
静岡県琵琶協会
錦心流琵琶菱風会

武田恒水

会員一同

〒420 静岡市丸山町八七

筑前琵琶橋会師範

久徳旭蘭

〒651 神戸市真合町八幡通四ノ二ノ一七
電話〇七八(二二) 一六一〇番

雲井の月をよそに見んとは」
涙を拭くも忘れ萱
破れし庵に入り給う
平氏万霊の位牌あり
想い起こすはかの早柄の修羅の海
一門亡霊 頓生菩提
見渡せば 残んの花の色もありぬ
此処こそや 実て救光の法の庭
光の陰をば惜しまなん」

好きな曲目のあれこれ

編集部



昨年一月から十二月までの一年間に、全国各地で開催の演奏会や温習会、慰安会、テレビ・ラヂオ放送など、京絃社に寄せられたプログラムや通信等の合計百三十六件の薩摩、筑前の個々に亘り、演奏された回数曲目を詳細に摘出した結果、左記のような数字を得たが、これによって琵琶人全般の好きな曲目、得意とする曲目の一端を掴むことが出来たようない気がする。

数年前にも一、二回この方法で統計をとったことがあったが、筑前と薩摩に分類して調査したのは今回が初めてで、男性の多い薩摩系、女性の多い筑前系、それぞれの性格が、

数字の上に如実に現われているのも面白い現象である。多少とも読者の御参考になればと思つて登載した。(頭部の数字は一年間に演奏された回数。)

なお、この調査には、昨秋催された錦心流一水会全国大会、筑前旭会全国大会、同橋会全国大会の調査資料が手許に無いので、右三大会で演奏された曲目は計上されていないことをお断りして置く。

- 薩摩琵琶系(薩摩正派、錦心流各派、錦各派、鶴派、浪曲琵琶など主として薩摩琵琶楽器類を伴奏用として演奏するもの)
- (三五) 白虎隊(小曲を含む)
 - (三二) 本能寺
 - (三一) 川中島(小曲を含む)
 - (二三) 城山 湖水乗切
 - (一九) 敦盛 八甲田山(吹雪の敵)
 - (一八) 西郷隆盛
 - (一六) 鉢の木 茨木 戦艦大和
 - (一四) 井伊大老 薄陽江
 - (一三) 菅公 石重丸(小曲を含む) 山科の別れ
 - (一二) 吉野落(上下) 彰義隊
 - (一一) 羽衣 新撰組 舟弁慶 竜の口
 - (一〇) 紅葉狩
 - (九) 俊寛(上下) 月下の陣 別れの盃 雪晴れ
 - (八) 屋島の誉 坂崎出羽守 大高源吾
 - (七) 横笛 接待 木村重成 大楠公

寒 中 御 見 舞

正派薩摩琵琶	西郷天風	錦心流琵琶	馬場鴨水	錦心流琵琶	植村寛水
〒156 東京都世田谷区経堂三三三七六 電話〇三(四二八)七四八三番		〒606 京都市左京区下鴨 藤倉町一六 電話〇七五(七八一)三〇五〇番			
京都琵琶協会々員 日本琵琶楽協会々員					

- 曾我兄弟(時雨曾我、夜討曾我などを含む)
- (六) 母常盤 忠度 小栗栖 異国の丘
 - (五) 河内の宿 七卿落 屋島懐古
 - 青葉の笛 桶狭間 淀君 小督
 - (四) 富樫の涙 勿来の関 菊水の旗
 - 羅生門 勤進帳 寂光院 黒田
 - 武士 恩讐の彼方へ 金剛石
 - 常陸丸 坂本竜馬 巡礼お鶴
 - 松の廊下 修善寺物語
 - (三) 父帰る 武蔵野 春の調べ 桐
 - 一葉 重衡 送別 曲垣平九郎
 - 石川啄木 耳なし芳一 北条政子 龜山上皇 楊貴妃 乃木將軍 名月逢坂山 利休の最期 小野訓導 安達ヶ原 伊豆の御難 門出
 - (二) 秋風故郷の山 重衡 宮本武蔵 良寛 二〇三高地 元寇 盛綱 先陣 真木の雫 静幻想曲 乃木静子夫人の歌 光秀の最期 血染の聖教 由比正雪 実朝公 足柄山 形見の桜 秋海棠 花売翁 道成寺 桜 太田道灌 蓬萊山 花紅葉 衣川 村上喜剣 迷語もどき 須磨の浦風 台湾入 巴の前 吉野懐古 故郷の道 戻り橋 小松の操 竹生島 静 狩野の雨 椎葉情緒 七十三曲(省略)

- 筑前琵琶系(旭会、橋会、翠流、美也田流など主として筑前琵琶楽器を伴奏用として演奏するもの)
- (一八) 扇の的
 - (一七) 衣川
 - (一三) 二〇三高地
 - (一二) 堅田落 若き敦盛 大物の浦
 - (一一) 壇の浦 秋風故郷の山
 - (一〇) 安宅の関
 - (九) 小栗栖 伽羅の兜 綱館 坂崎出羽守 城山
 - (八) 白虎隊 赤垣源蔵 大高源吾 湖水渡り 坂本竜馬 敦盛
 - (七) 石重丸 井伊大老 大楠公 月に思ふ
 - (六) 粟津ヶ原 本能寺 姫ゆりの塔 玉藻の前 松の廊下 大石主税 義士の本懐 五条橋
 - (五) 関ヶ原 鴨川の露 都落
 - (四) 四條原 常陸丸 禪師と正宗 吉野懐古 羅生門 天の羽衣 新琵琶楽 神崎与五郎 巖島の戦
 - (三) 別れの盃 対王丸 伊豆の御難 西郷隆盛 湊川 戦艦大和 夜討曾我 滝善三郎 金剛石 加藤清正 菅公 粟津の露 川中島 橋中佐
 - (二) 大徳寺 赤穂義士 高田の馬場 大石良雄 由比ヶ浜 巡礼お鶴

柳の精 唐人お吉 茶道松風の曲 華道花の恵み みゆき 名残の緒琴 村上喜剣 六十一曲(省略)

江州安土浄蔵院

秋季法要に琵琶献奏

十一月三、五、日大阪琵琶同好会協賛。(三日)城山、矢野旭信、衣川、三人、坂崎出羽守、辻旭城、坂本竜馬、石橋旭嶺、湖水乗切、中山鳳水、新撰組、天津八千代、二〇三高地、奥村旭美、戦艦大和、田中敷水、月に思ふ、中島旭穂。(四日)松の廊下、旭信、若き敦盛、三人、五条橋、旭城、青の洞門、旭嶺、白虎隊、鳳水、安宅の関、八千代、天の羽衣、旭美、常陸丸、敷水、伽羅の兜、旭穂。(五日)赤垣源蔵、旭信、綱館、三人、秋風故郷の山、旭城、大石主税、旭嶺、伊豆の御難、鳳水、大物の浦、八千代、椎葉情緒、旭美、巡礼お鶴、敷水、黒田武士、旭穂。

箱根温泉に二泊三日の同人旅行

十二月十一日正午小田急新宿駅に集合箱根二の平温泉に二泊。一水会城北支部青木早水氏と門下生、山崎錦幽氏、若宮旭登女史の一行、一水会武蔵野支部杉山旗水氏の一行、加藤錦陽氏、晴楓会の一行、一水会城東支部松